小說通

特別
イ 4
3159
8 20

14
3159
B20

小説通

稗史小説解嘲辯

稗史小説とは何ぞや、当世ふ所の読本草双紙の類也、誠に婦女児童の玩物たるべし、物堅き儒者学士は草双紙本草雙紙の類は世を誣ひ人を惑はす物にて取るに足らざる物と思ひ、手だに触ざる人多し、是等の書も我皇朝にて昨今に巧み出したるにあらず、既に唐山の漢書藝文志にも出で、夫より後の代々の史にも出せる事にて、素より小説稗官といふことは、細米を稗といふより街談巷説其細碎なる言に比喩し、彼道に聴塗に説く言も亦賢君王者は棄給はず、稗官を立て稗説せしむる

も下民の事情を識給ふ爲なり、孔夫子も小道と雖必ずも
觀べきもの有と曰まひしも、此匂荒狂夫の議をも採用ひ
し譯にて、此必ずとふ字決能味はひ察すべし、故に漢以後
代々稗史小説絶へず、唐の代に至りては愈其書多くなり
宋元以来は尚更盛に行はる、皇朝にも宇津保竹
取の物語より初て、源氏伊勢の物語出てより、益
世に賞し翫ぶ事となれり、言迄もなく其作爲する事
は架空無根の言なれども、亦任る所無に非ず、表には海
淫導慾を記すが如く視ゆるも、裏には人世の無常を
知らしめて勸善懲惡の心を含み、或は其時世の時めく
人の邪なる行ひを事に以喩したる扨、今の世よりして
是を看れば、直に其代に在りて其人と話するが如く、能き

考據の物なり、夫等の事には正史實錄の有に、何故に斯る
野乘を採用ゆるぞといふに、正史實錄は尊き物ゆえ、
採用るは勿論の事なれども、正史は其代々々に識せし
書なるが故に中には事に當りて忌憚べき事は、憚り
て有の儘を記しるさず、事を避て記すゆえ曲筆なし
といふべからず、先皇朝の正史第一たる日本書紀にも
天武帝即位の事に到ては、唐山の明朝に燕王が靖
難の師を起して、建文帝の位を簒奪ひたる事と同じ
けれ共、書紀は天武帝の皇子たる舍人親王の編述な
れば、天武の簒奪をしるし給ふ事なし能、是非曲筆
をなし給ふは此止事を得ざれば也、第一の正史すら
如し斯況や其他は推て知るべし、唐山の正史は猶亦

是より甚しき事あり、去ば迚正史を擱て外に據らければ彼稗史小説と併視れば、扨は斯もあらん歟と思ふ事ありきにあらず、但し稗説も著作者の学識の狹博と才不才に倚りて可い採あり、唯一概には謂がたし、其取捨は看人の学力に在る事にて、是我具眼の人とふ、迂儒の徒やこもすれば、唐山の俗語に委しく通ぜざれば小説を讀ども何の詮なし、看ざらんも同じとて笑ふ者あり、どふか聞へたる理の如くなれども、唐山は大国にて其幅員萬里にして東西俗を殊にし南北風を異にすれば、其所に隨ひて諸物の名方言等不一、其上にもなを古今の異同尠からず、是は唐山のみ如し斯なるに非ず、皇朝とても日向大隅の俗語と南部津輕の方言は同じからず、夫を一一に知竭す事は如何なる大儒学者も出来ぬことなり、我邦の言を知竭す事能はず、況や外国の俗語に於て哉や稗史小説の用はそこらの事に非ず、唯勸善懲悪たるとこして其世の時勢人情を推し考へ、正史實録を看るの助と爲にあれば、其書の大概を了解して用に充るぞ宜しからん、縱如何程苦勞して学べばとて、字書にも無故事、原始も糺ならぬ方言俗語何の書に據りてか糺し究むべきや、今俚言を取て言ば今江戸の俗語に自慢する我味噌を揚るとノひ、嫉妬する我甚助と云、是等は何の義理もなく、俗間にてふと謂出しが流行して言通ふる、斯る言にも偶には種々説を設て説人も有

ども皆牽合附會にて執に足らず、我邦の俗語すら
右のごとし、唐山の俗言明らめ難きこと推て知るべし、去
れば、とて家伙をドウグと譯し、行李を二モツと譯する位
の事を知らざれば、宋元以後の書、禪家の語錄、朱子
子の語類抔俗語多くて記せし書讀得難し、
是亦俗語を知らで叶はぬ譯なり、然らば小説は讀
は、宋元以後の書を看るため、且は勸善懲惡の爲
なれば、往古より經書は勿論其餘なほ近思錄などの
いふ教誡の書少ず多し、夫等を閣て小説稗史を採る
は如何にといふに、今一文字通の人數婦女兒童の輩は
諸子教誨の書などは物堅くして、聞くも倦てなかなか
耳にも入がたく、便俗の傍の猫四小判のごとし、小説

の如きは仁義釋教惡無常種々の情態を説
出して、自然と五倫五常の道へ導く如くなる物
にて、比喩たとへば芳餌を垂て魚を釣が如し、其益無し
といふべからず、然るを小説は淫慾の書とて
其疵瑕を擧て傍らば、なほ小説にばかり限るべからず
食は人々日用に缺べからざる物なれども、夫は飽食
して滯れば食傷となりて忽ち人を惱すが如し、唯己
が心に好まぬ事は色々と理を拵へて傍るは、全く愛憎
の私心にて公通の論といひがたし、

小説品類

小説の類種々あり、是皆みな一ツに心得たる者あり、先此方にて全備したる源氏物語、伊勢物語の類は、唐山の水滸傳、西遊記抔と同じ、宇治拾遺物語、古今著聞集などは、西陽雜俎、子不語の類とふべし、此方の物にて、唐山の剪燈新話、怪案驚奇の類なり、又唐山に傳奇院本と云ふて、別種の小説あり、此方の淨瑠璃本、歌舞妓の根本（江戸にては大帳と云ふ）とひとし、唐山の笑林廣記、笑府等は、此方の鹿の卷筆抔と同じく落し咄しの本也、唐山の僧尼蘇子瀛、肉蒲團等は猥褻の最甚しき物にて、此方の中本、人情物、金瓶梅傳の比とふべ

こゝ、斯品格我頒て、其土に彼土と此土と風土の違ひ少
人情の異、同球考へ合せて看るべきもの、

稗史古今の差別

稗史古今の差別は和漢同じ少雖も、唐山は文華の
國ゆえ、戰鬪爭亂の際と雖ども絶ず著述する事ある
ゆへ、古今の□□□□の異同のみ、

皇朝の如きは往古は文物盛にして、源語、勢語の類も出たれども、原は武用なるが故に、源氏平家戰爭の以後は武士時代得て文事は廢り、應仁の大亂より後は尚更偏武の世界となり、稗史小説どころ迄無かりしは、東照神君廣大無邊の德澤にて、海内泰平の化に歸せしより、文運漸々に開け、和漢の學者彬々として出でしより、稗史小説も亦起りて、讀本草雙紙の類も出る如く成たり、何ゆへ讀本と名付しと云に、最初は誠に小兒の弄物に、纔か五枚か十枚の紙に猿蟹合戰桃太郎鬼退治など書てこれを、詞書は一言か二言有かなしにて、繪は專ら着る計りなる故繪雙紙とも云、讀本は是と特にて、一冊の紙十六七枚の内に繪は

纔に二頁三頁にて、餘は皆文字計りにて、專ら讀べき料にまゝなれば讀手と名付たり、讀本の始は京傳が原ちりと思はる、元祿年間西鶴なる者出で、小夜嵐物語等の抄作出てより、追々諸才子の新奇の作あるが中にも、八文舍自笑江島其磧の兩人の作意滑稽を專らとし、人に頤を解しめしより、是に倣ひて色々道外たる書行はれて、八文字屋風とて皆人賞翫せり、江戸にても此頃墨算入道大阿ちゞ〻ふ者の諸作あれども皆草稿にて京都へ登せて、京都にて板行にせしといふ其後替國主人、剪枝畸人、近路行者抒山樵諸才子、唐山の稗史剪燈新話、石點頭、八洞天抒に擬して繁々夜話、英草紙、雨月物語等を作る、然れども皆是一回毎に別の物にて、全部總て一團圓の作はなかりしに、明和年間に至りて建部綾足といふ人、唐山の水滸傳に擬して、芳野物語一名本朝水滸傳前後編十冊を作る、是皇朝にて長き物語の小說を作る權輿なり、夫より次第に巧になりて、書の首四五頁の紙に繡像を出すは、唐山の小說演義三國志、續水滸傳等に倣て、山東京傳が忠臣水滸傳より畫き始たり、亦本の間だにさし繪を入るゝ、唐山の稗史西洋記、平妖傳等の書の趣に倣ひと見へたり、但し唐土の演義三國志、水滸傳、西遊記等の百回本百二十回本などの如き大部續物の作は無なりしに、曲亭馬琴が椿說弓張月、里見八犬士傳等に新奇の趣向を立て、唐

山の稗史の皆球換骨奪胎して作せしより此方、諸作者
皆續き物を出す如く成たるなり

扨繪草紙の事は昔に引ふ如く小兒の弄物なれ
ゝと浅はかなる事なれ畫て、紙數ハ幾五枚づゝ、多きは二冊にして上下にて十枚、此價幾に二十銅三十銅なり
上方にては繪本と唱へて、表紙は鼠色の紙、少し價の
上れるは青色を用ひ、猶亦價貴きは行成紙を用ふ、
此價卒銅計、江戸は攻五枚十枚の本に丹表紙を付て
赤本とふ、是享保年間の事なり其後寛延の頃に至て
は鬱金色の表紙を付る、又草雙紙とふことは、素より
價賤しき物なる故、紙も下品の半紙に下直の墨球用
ひて板を摺たれば、其香いなりにも臭ければ世間にて臭草
紙とふ、書肆どもの其名球嫌ふて草雙紙
と呼替たるに、幸ひ黄なる色に更ひにつき、草の初生

の色につるぐり、いよく草雙紙と稱し、亦書肆の仲間にては青とも云へり、天明の頃は草雙紙の紙數段増て十五枚となり、表紙のよるる素題紙も彩色摺となり春町、喜三二、全交などいふ諸才子滑稽を專とし、時世粧を風して作りたる故、士庶大人もめでようこびて數多く賣たるに、猶々新奇を求盡す如くなりこしぼ、遂に草雙紙は大人の玩物となれり、夫も文化に至りては、ますく盛に成て紙數を増、山紙摺となり、表紙も極彩色の摺付表紙となり、價も百銅百二十銅餘の高料となりしのみならず、五編つゞきの本出る如くなりたり、就中種彦作の傾紫田舍源氏、馬琴作の傾城水滸傳、新編金瓶梅の三種、合巻草雙紙の純粹といふべし、委しき事は戯作考補遺、近世物之本作者部類に出たり、幷世視るべし、唐山には草雙紙に擬べき物なし、長崎に舶来せる二尺四方位なる唐帋を中に幾しきり隔て、一ツ宛の板に、水滸傳三国志等の事を所々畫がきて、其畫の上に其事の譯を略書して、彩色摺にしたる物あり、先我邦の草雙紙の類ともいふべきか、

浄瑠璃本歌舞妓の根本（舞臺附とも、せりふ帳
とも云ふ。江戸にては大帳と云）は唐山の傳奇院本なり、浄
るり本も遙ばんは、丸本は素人には見せず唯其本の
文句を細かに寫して、所々繪にして婦幼の慰物とす、
其文字細なるゆゑ、俗に亂本といふ、其後に土佐節
盛に行るゝ時、初て大字七行の本に太夫の節章を下せる
本を出す、是迄は作者の名を出すといふ事なく、多分
傳の趣向、或は古き物語本などの躰に倣ひて、見外題も物
々敷名付ず、定家又は和田酒盛などゝいふ、享保の頃に
至りて、義太夫節專ら流行の時に逢て、近松門左衛門
紀の海晋等、絶妙の作者出てより、大字七行の本に初
て作者の名を記し外題も關八州繋馬、心中天網島

三輪山等の能ちどと、物々しく名付る様にちりまり、唐山の院本には序跋あり、彩像あり、我邦の浮写り本には序跋ちりしに明和安永年間、稲内鬼外が作の本神霊矢口渡、噺家(はなしかとり)案葉相生源氏には跋文あり、寛延二年、並木丈助が作の華和讃新羅源氏、寛政四年、柴良輔が作の累解脱打、鋪等には彩像にしたり、追々好事にちりて、唐山に擬る事如此斯、我邦近年述作せし中本物入情本とゝふは艶郎妓婦の徒の痴情狀態を書し物にて、原は新内祭文ちどゝふ鄙俚の唱曲より、俳意づだせし物ちがら、是も唐山に類ちき事にあらず、玉嬌梨、二度梅、繚妬傳ちどゝふ、纔か四五冊の内箱本の、才子佳人の奇遇を書たる本ゝゝらもありて

是は唐山の書肆の徒が唯商賣の爲に杜撰に著述せし冗籍(やたらぬほん)ゆゑ、文人佳客は是を仕込本と稱へて賤しみ賞せぬもの、我邦の中本と桔槔せしものとゝふべし、

讀本彌像之精粗

稗史の彌像は、古今ありて一樣ならぬ事は、唐山にても同じ事にて、既に西廂記の彌像は程知遠の畫にて畫工の名も出しあり、其餘平妖傳の甘回本後西遊記等の畫は最巧みたり、其餘禪眞後史笠翁十種曲等の畫は拙にして看るに耐ず、我邦も享保頃迄の繪入は、誠に麁畫にて、一冊の中にさしの繪巧に二三頁に過ざりし、文化の初に至て、京傳が忠義水滸傳の口繪、唐山の水滸彌像に倣ひて、北尾重政が筆は、奮ひて畫きこなすり、殊外に評判まかりし故、馬琴作の繹水滸畫傳の繪を葛飛北齋畫がき、京傳作の善知鳥全傳をば歌川

豊國繪がきて、皆々巧妙の手を盡せりより、諸作みな
新奇を競爭ひて繪がくことは成り、亦さし
ゑに俳優の似貌を出すは、敵討松山鑑といふ本に豊
国かき始めしより、折節には似貌の本を出すより、京
攝にて讀本に口繪をさしゑの細密にかきたるは、玉山が
繪本太閤記より巧にかきりし、其頃は寛政の末かり

草雙紙畫之精粗

草雙紙の繪以前の享保より寶暦の頃迄
は、富川吟雪、鳥居清經などいふ畫工の繪は、如
何にも麁畫にて、鳥居の銀杏足とて、人物手足の
かき樣、別に一流の畫がき方にて、其上全躰の畫風、
總て省筆をもして、文字のかき入もすくなく、至って
麁なる物なりし、安永天明の頃に至り、鳥居清長
北尾重政等より追々繪樣細かに成り、書入も段々
密にかりたれ共、其頃までは人物の眼目つき目とて、
一如斯ゑがきしに、文化の比、歌川豊國が俳優の似
顔口繪がき初しより、一如斯目に畫がく事に成た
り、其餘の畫すべて是に準じて知べし、當時は精

密の細畫にて、書入も いよ〳〵細かにあり、京攝田舍も江戸の草雙紙を愛玩するゆゑ、上方の繪雙紙は當時はあるかなきかといふ位なり

草雙紙の類にて、今古風を精粗轉倒せしは、芝居の繪本なり、京攝も江戸も同じく、いぜんは繪も精しく、書入も文も細かにて、此場は何々の所と大抵其場の次第なるあらかた記し、中には詞がきく迄入れしもあり、江戸にては、天明の頃は、俳優の似顔なるうつせしもありしが、京攝江戸とも、享和のころより到つて粗になりて、人の形も躰もちがはざる繪にて、紙數なも減じ、唯其役々の替名と俳優の名而已にして、其場の譯は更にしるさざるゆゑ、繪を見るまでにて、何の事歟わかつず、餘の草雙紙は以前は紙數すくなく、繪組書入も粗なりしが當時は繪數も次第に數段增し、製本万事至

て精しくふれるに似ず、芝居の繪本は前にふれし如く當時は到て粗に成りては、如何の事にやふしぎなり、

讀き繪雙紙の出所

讀本畫雙紙は誠に兒戯の玩物なれども、皆是にも夫夫據ありて、杜撰のみにもあらず、然る我其出所我知らずして、讀本繪雙紙等の巧拙我謂ものあり、因て今少し其出所の斷あるといふこと我、茲に出す事左のごとし

先第一當時讀本の巨擘たる里見八犬傳は、水滸傳に據て作りしは、皆人の知る所なれども其中にいろ〳〵柏案驚奇等種々の小説を交出せし所もあり、美少年錄は搗(とう)臼(きう)孤間評(ひやう)に倚、俠客傳は好逑傳による其他稲妻表紙の醉(ゑ)ぼだひ我摹(うつ)し、自来也の數書纂要我擬たる妬き枝學に違あらず、猿蟹合戰、桃太郎鬼が島渡り、舌切雀、花咲せ爺等の事、

宇治拾遺物語、福富雙紙、其外經文の中よりも
出たるよしは、さきに著作堂老人が著したる享雜の記
に審らかなり、いづれも淫美善彈惡の心を含まざるはなし
唯当時婦女子の事ら嬉び玩ぶ人情本程惡きはなし、
是は元より其出所とする所も、新内ぶし歌、祭文本、
チョンガレ節などの卑俗の物より取出して、男女淫奔
猥褻の事のみ巧綴りし物なれば、少しも勸懲の意は
なく、纔なる小冊子にて、畫工筆工も多からず、拙作者
の骨も折れず、心易く刊行なるゆえに、本手のなき貸本
屋などの糊口の爲に優に刊行せし籍なれば、近頃官
禁ありて絶板になりしは至極の所置なりと申すべし、

洒落本中評判記差別

芳に出す諸書の外に洒落本といふは、安永天明の比、
彼事女通といふ事流行せし頃、北廓花街の趣を
作りし物多く出たり、京摂も是に倣ひて、是に似寄
たる書も出たり、是等も遊里放蕩の事を述べれども
唯滑稽を旨として、ひろすら淫導慾の書にはあ
らず、一時の笑話に供し迄にて、当時の人情本に競
ては、毒なきものといふべし、其書名の大抵は、遊子方言
船頭新話、娼妃地理記、通言總籬等なり、夫さへ
寛政の頃、官禁ありて絶板せ命ぜられたり、中本といふは
洒落本に似て非なる物にて、明和の頃、風来山人が著し
たる六部集（六部集は飛だ噂の評、里の芳環、

敬屁論、同後篇、天狗髑髏鑒定綵義、疎院隠逸傳六部ありを始め一九が膝栗毛、瀧亭鯉丈が八笑人、三馬が浮世床浮世風呂、京傳が腹筋鵜鳥石の類なり、是は京攝には古よりの八文舎自笑、江島其磧が作の、親父気質、娘気質の類の一変したる物とふべし、又種々の評判記は原は役者評判記より出たり、役者評判記は、今より百五十年も以前より年々出て、連綿として中絶せず續きたるに、弘化の初年より相罷りは惜しき事也、此書も最初は京攝の俳人西鶴抔いふ者共なりく評せしが、後は八文舎自笑が元祖引受て評判する様に成て、三代迄で相續せしが、當時の子孫無頼の徒にて、中々作所ではなく、二代目自笑の門人梅枝軒泊鷺といふ者引受て、年々の評判せしが、弘化の初年に物故なりて評判絶たり、右の役者評判記に倣ひて、虫の評判、狂歌の評判、狂歌初め、種々の評判、佛家宗旨の評判、役者評判記も享保以後寶暦の頃迄は、年々顔見世、春狂言、盆替りと三度づゝ出せしが、安永天明の比より、顔見世の時ばかり一度出す事成なり、寶暦頃迄の評判記は、面白き、戯文の序ありしに、近頃は序文もなく、殊に江戸の評は至て疎漏に成て見るに堪へぬ様に成たり、江戸評の内にも式亭三馬が書しものは、序もありて評判もくわしく、三馬没して後の江戸評は、散々の事に成たり、

評判記品目

役者評判記有て後、夫に倣ひて種々の評判記出たり、

元禄　能役者評判記

同　鑑工評判記

明和　三都字者評判記

同　義太夫引（上るり太夫評判記ともり）

天明　俳優風（狂歌師評ばんき）

同　茶臼芸（諸げい評ばん記）

安永　角力評判記（吉原岡場所）

安永　客者評判記

同　福壽草（諸初物評判記）

天明　寶貨鵜（替り錢評判記）

天明
菊壽草（草雙紙評判記）
同
岡目八目（草雙紙評判記）
花の折紙（洒落本評判記）
江戸自まえ（諸商賣評判記）
江戸土産（五十三驛評判記）
千草聲（虫評ばんき）
五百崎（同）
明和
名代六花撰（江戸娘評判記）
闇の礫（義太夫上るり評判記）
鶯宿梅（同）
猿輿（同）
龍の美屋子（魚評ばんき）

水の富貴寄（京名物評判記）
役者女房評判記
寶暦
儒醫評林
諸宗評判記
茶番遊（茶番評判記）
鞠評判記
刀銘盡評判記
犬夷評判記
先あらまし〜かくの如ごとし、此餘時々出す所の傾城、諸国名所、娘淨るり等の一枚ずつの類は夥敷事にて枚擧に遑あらず。

解嘲拾遺

今の世上に物堅き人は、讀本の類の淺に年暦を建、古人の姓名を假借して、實事らしく書き
すは、世を誣ひ人を欺くに非らずやと謗る者あり、
是は稗史小説の意味を能心えぬ故なり、既に古
人も稗史小説を見るには、經史を看る目を以て
更て別の眼目を以て視るべしともいひ在て、原小
説の趣意は勸懲にありて、唯假に人のちき名を
作り設ては、看官の人に入難し、亦年暦を
借て言ぎれば、年月の際に立がたし、爰より役
所までと云目當を付し物にて、畢竟小説は
此世界の外に、別乾坤の一世界ありて、茲に説く

所の宋江は宋朝の代の宋江にして、又其宋江非
ずと見る時論なし、亦実に偽書を作りて人を
欺かんと思はず、斯る剽竊模様擬の事を為さ
ずとも如何杯なる仕方あらむ、稗史小説ならず
して、実事らしき偽書多くあるにて知るべし、
然る我夫を咎めずして、是ばかり我謗りしは
いかにぞや

又稗史小説の年暦土地等の、実録に合ざる
我謗る者あり、是も亦非なり、前に述べし如く
小説の年暦は、何年何月と限を付たる
物、土地の名も亦其如く茲より彼所と境目
を建たる事にて、是を強て実録に引合さば、
夫こそ牽合附會なるべしはめ、

又小説を讀て、一事々々に理を推て、是は斯あらん
哉如レ斯いふたり、彼は斯も書べきを思こそ
いふと実事の理屈にて論ずる人あり、小説は、
素より撥レ虚架レ空の言、佛家の説法談義
荘子の寓言の如く、同じ勸懲の爲にしたる
者にて、際要の事は一〻しるせども、書面に
拘ずる事は省きて言はず、然るを右にいふし
理屈者の論のごとくいはゞ、譬ば編中に獨の
病者あるに、夫には何某といふ醫者を呼
何の藥を用ひ病死せしかば何寺へ葬り、何
宗なりしなどいはんは餘りくだ〳〵しからずや、夫
も編中其醫者につき、或は又其藥につきて趣

向作意ある時は、其醫其藥と名をも出ず、
若左もなくて唯病者の死去せしは、醫藥のこゝる
ことなくて死せりと許記して、無用の衍文は省くか
り、去れば主、初め出たる人の立ぎゝして死んだ
其、他国へ行たるも、師かたのつかぬは拙作か
れば是は論ずるに及ばず、徒に戸を探して穿
鑿の説をなすも、是亦小説の意を識らざる
者といふべし、喻て、ほ人に今歌舞妓狂言浄瑠
人に、其狂言趣向の巧拙、役者の藝の可否浄
論ぜずして、其芝居興行の端、雑費の多寡
役者の任處すること、其事の名年齢、或は何某
が當春狂言久松をせし時著せし服装、當秋義

經の役にて、下着にしたり拵と云をば、見功者也と
奢る人あり、成程委しきは委しけれ共、肝要
の狂言の沙汰には非ずして、餘事の論辨ゆえ、
徒る所無益の説なり、是等枝葉して無用
の辨といふ、小説の穿鑿するも、斯る類の事
もつとも多し、心を風雅の域に遊ばしめて無礙の幼
境を了悟せざれば、小説の眞意は味ひ難からん
か、

小説品類拾遺

唐山にて作の巧にて能出来たる書には跡すり
其後編を付し物少なからず、水滸傳の水滸後傳
ある西遊記には、續西遊記、後西遊記二書の後
編あり、金瓶梅の後編には隔簾花影あり、
平山冷燕の後編には兩婚史傳あり、是等は
皆前編とは別人の作にて、前編に剩殘の人名
を採て趣向を異し物ども、此數種の前編
は孰も名作にて、各作者の意匠の隱微ありて
剩殘ある如くなれ共、其より後編を作久と
て、先其餘趣を後置しにもあらねば、夫へ後
編を付ては贅物にて、本編とは是非矛盾す

る事なこあり、是は小説を好みて翫味すれば能ふ
るなり、又我邦の小説ニ三編續きの物はこれら
ず、其譯は唐山の書に擬せる物なるから、前編を
著す時よりして、早ニ三編を綴るべき斡輿
を殘し作る故、程拍ナよく前後能揃ふなり
去れども、前編の時より早後の趣向を控へ有
ゆゑ、筆を十分に働ずして能、何か物足ら
ぬ如く見ゆ、是則唐山と我邦の小説、前後編
に差別ある子細なり、